

平成 22 年度

事業所名 : グループホーム ななしぐれ

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391400017		
法人名	社会福祉法人 西根会		
事業所名	グループホーム ななしぐれ		
所在地	〒028-7404 岩手県八幡平市堀切第14地割10番地7		
自己評価作成日	平成 22 年 10 月 20 日	評価結果市町村受理日	平成 23年 2月 7日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0391400017&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成22年11月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

平成18年8月、西根会北部DSIに隣接した敷地に設置され、建設時にスプリングラーを設置している。運営推進委員や災害援助協会の方々から実際の避難訓練をみていただき意見をいただきながら後に役立っている。利用者はすべて市内の方でそれぞれのペースで自由に過ごしている。昨年できていたことが今年はできなくなっている利用者もいるのでリスクを考えながら利用者本位の生活を考えていきたい。春は畑作りをし夏と秋は収穫した野菜を食べて冬は雪をみて寒さを感じ、それぞれの四季を味わっていただいている。ななしぐれの理念である聴きましよう・話しましよう・笑いましようをモットーに家庭的で笑いのある生活を取り組んでる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

市民に親しまれている七時雨山が望める豊かな自然環境にあり、隣接のデイサービスとの協体制(行事・防災)は大きな強みとなっている。職員は「理念」(聴きましよう・話しましよう・笑いましよう)を絶えず確認し合い、共有しながら実践に繋げており、その努力は利用者の笑顔・明るい表情に結びついている。そのような表情は通常よりも大きな写真となって屋内の様々なところに掲示され、広報でも伝えられることにより、家族の大きな安心感にもつながっている。また地域住民参加型の祭りの主催や地域住民による「災害援助協会」の組織作りなど、地域を招くことでの交流、協力関係作り積極的に努めている。一方で、職員は利用者のケアワーカーとしてだけでなく、互いに気遣いあう思いやりのある関係性を大事にしており、そのような意識は一人ひとりに作られている個人アルバムの、他利用者や職員と映っている瑞々しい写真にも表れている。利用者の表情を残し、伝えながら、利用者と共に暮らしていくことと暮らしの場を積み重ねていくことを大事にしているのが印象的な事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

[評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会]

事業所名 : グループホーム ななしぐれ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「聴きましょう・話しましょう・笑いましょう」を理念としている。誰にでも見えるところに掲示し、定期的な研修会では職員全員で唱和し笑顔の絶えない支援に努めている。	理念は職員で話し合って決め、誰にも見やすい場所(2箇所)に掲示するとともに、研修の場で唱和したり、会議等で折に触れて確認し合いながら共有し、利用者の笑顔が引き出されるようなケアの実践に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的な散歩や買い物などの支援に心がけているほかに地域の行事や祭り事にはできるだけ参加するようにしている。災害援助協力会や運営推進委員の方には避難訓練に参加していただきいろいろな意見をいただいている。	ホーム主催の夏まつりには、唄・踊りに地域住民が多数参加・交流しているほか、小学校行事への参加、ボランティアの来訪(唄・踊)などもある。近隣住民による災害援助協力会(20名)とは運営全般について報告・情報交換等を行うなど、協力関係を築いている。	住民の自然な来訪は難しい立地環境にあるが、災害援助協力会や隣接デイサービスの家族会等、地域住民が集まる機会にも地域交流の視点を柔軟に見出していただいたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所として活動はしていないが相談・問い合わせには対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	活動報告・事故報告のみならず委員の方々にもいろいろな御意見をいただいている。又GH内で会議をしているので利用者の生活の様子をみていただく機会がある。	会議は、状況に応じて時々の課題に即したテーマを設定し、委員以外のゲストも招いて意見・助言も得るなど、工夫が見られる。更に出された意見は「災害に備えた車椅子の備え付け」などを取り上げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	書類などの手続きの為市役所には足を運ぶ機会がある。その時必要な情報を聞いたりする時がある。又、市役所の職員が運営推進委員や入所判定会議の構成メンバーになっているので会議では意見・助言をいただく機会がある。	行政職員が運営推進会議や入所判定会議のメンバーに入っており、会議を通じて、また行政機関に頻繁に足を運び、ケアや運営の実情を密に報告するよう努めている。行政職員はホームを理解し、疑問点の照会や情報提供などにはよく対応してくれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関して職員は理解している。日中は玄関の施錠をせず離設者には職員が同行している。	身体拘束をしないケアについては、勉強会や普段の会話の中で折に触れて確認し合い理解を深めている。職員は利用者が外に出ようとする場合でも、抑圧しないで同行し見守るなど、身体面・精神面で拘束のないケアの実践に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会に参加し学んでる。又普段から言葉使いに気をつけるように配慮し職員同士がお互いに注意できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部の研修会で学んだが理解はまだ不十分と思われる。現在制度を利用してる人はいないが今後の為詳しく学ぶ機会を持ちたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結・解除はサービス開始前に説明している。改定についても家族に電話等で説明し来所時もさらに説明し了承していただきその上で署名・捺印をいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	御家族が来所された時連絡がとれた時は利用者の生活の様子をお知らせし意見を伺う時がある。又季節の行事・誕生会は家族にも手紙でお知らせしている。	家族は月1回は面会に来ており、その都度生活の様子やケアの状況を伝えたり、希望等を聞いている。アンケートの意見にも誠実に対応し、対応が難しい場合(例:職員が一時に複数入れ替わりがあったこと等)には理由を丁寧に説明し納得を得ている。	家族に定期的に送られる「ななしぐれ通信」は、写真で利用者の生き生きとした表情が伝えられ、作成する担当職員の個性も伝わり家族から好評である。丁寧に伝えることで家族の関心と参加を今後も促すことを期待する。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的な職員会議の中で意見・提案など発言の機会を設けている。又理事長・所長・GH管理者が話し合う機会がありGHの状況をきいてもらう時がある。	職員会議(3ヶ月に1回)では、勤務体制や仕事の進め方等運営面についても職員の意見等を聞くようにしている。また管理者は職員の声・思いに応じて出来るだけ残業しないで早く帰ることを奨励するなど、働きやすい職場作りに心がけている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員は各自で向上心を持ち資格取得に挑戦している。労働時間に関しては勤務時間が終わったら退勤するよう声かけしてる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人の研修会・GH協会の研修会に参加している。参加した職員は内部の研修会で職員に伝達している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH協会の研修会に参加し情報交換している。又交換研修もあり交流の機会がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス開始前に自宅訪問し本人と面接している。自然な会話の中で本人の困っていること・希望などを傾聴している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初回の相談から入所にいたるまで定期的に状況を確認しサービス開始前には施設内を見学していただいている。又家族にも不安・要望を傾聴している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状況を確認し利用者が考えられる範囲のサービス内容を説明している。又在宅時の担当ケアマネからも情報提供をうけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活の中で何かをするときは本人に尋ねその意向を尊重している。人生の先輩である利用者から学ぶ姿勢で対応できない部分・不安な部分を補うように支援している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時自宅での生活状況を家族に聞いたり職員からはGHでの生活の状況を報告している。体調不良時は家族へ状態説明している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	外出した時自宅に立ち寄って家の様子をみたり近所の人と会う機会もある。馴染みの場所には家族の協力をしていただき足を運ぶこともある。いろいろな場面を写真に残し利用者の回想法につなげている。	知人・友人の来訪のほか、馴染みの理容店を利用したり、家族の協力を得て馴染みの場所に出かけることもある。またホームでの生活や人との出会いの場面を写真に撮ってアルバムを作り、心豊かな回想のひと時を持てるよう支援している。	個人アルバムは入居以降から全員分を作り続けており、利用者の生活の歩みとそれを共有する人々が生き生きと写し出されており素晴らしい。利用者が紡いできた暮らしと関係を今後も支え続けていってほしい。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を考慮し会話が成り立たない時は職員が間に入って会話を支えている。食事時間は「いただきます・ごちそうさまでした。」と声かけの当番を決めお互いを意識するようにしてる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院が長く続いたりし家族からの相談があったときは法人のケアマネに相談し情報提供していただいている。契約終了しても様子を伺いにくる時がある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話の中から本人が何を希望されているか把握するように心がけている。把握が困難な時は職員間でも話合いをしてセンター方式を活用し利用者本位になるよう努めている。	普段の会話の中から本人の思いを把握するよう心がけているが、意思疎通が難しい場合は職員間で話し合うとともに、センター方式(「暮らし方シート」)を参考にしながら本人本位にその思いを押し量りながらケアに反映させている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時のフェースシートやセンター方式に記入し参考にしている。今までの生活のスタイル・習慣などを維持してもらえよう在宅時の様子をケアマネから聞いたりして把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	健康状態・生活の様子は毎日記録されている。生活の様子は日誌で確認したり申し送りや連絡ノートで周知され全職員が把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプラン会議は3か月に1回実施している。担当職員が利用者・家族の希望を取り入れプランの原案を作成しその原案をもとに職員で話し合いをしている。最終的に計画作成担当者がまとめ介護計画を作成をしている。	各担当職員が利用者・家族の希望を取り入れて原案を作成し、職員間で検討している。書写や回想といった本人の意欲や快適さにも視点がおかれているほか、3ヶ月毎の評価・見直しも確実である。日々のケア記録も、職員がプランの内容を意識化できるよう工夫されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活の様子は毎日記録され全職員で情報の共有をしている。ケアプランの実施状況も生活記録と一緒に取り入れプランの見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	受診時家族に情報提供をしたり、緊急時家族が付き添いできないときは代理受診をしている。又遠方より家族が面会に来た時は、希望があれば食事提供をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	長寿を祝う会では民謡・踊りのボランティアが来所し利用者も一緒に歌ったり踊ったりと楽しむことができた。夏まつりでは地域の人たちと輪になり踊り利用者の笑顔をみることができた。又理容院は馴染みのところへ行く人もある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所することでかかりつけ医の変更はしていない。入所前からのかかりつけ医に通院している。基本的に通院は家族にお願いをしているが緊急時や家族が付き添えない時は職員が対応している。訪問歯科診療も希望があれば対応している。	本人・家族の同意のもと、通院は基本的に家族が対応しているが、緊急時や家族対応が難しいときは職員が対応し、その結果を電話等で家族に報告している。また訪問歯科診療を受診している利用者もいる。	家族や本人の伝え方では現状が医療機関に伝えきれないこともある。情報提供等継続しながら医療機関の理解促進と適切な受診に結び付けていくことを期待したい。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	全管理者が看護師の資格を持ちすぐ近くの事業所にいるので利用者の状態に変化があれば相談し適切な対応・助言をうけている。又定期的にバイタルチェック表に目をどうしてもらっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院に出向いて面会している。GHでの生活を看護師に伝えることもある。本人に面会して不安の軽減に努めている。看護師・家族と情報交換し利用者の回復状況を把握している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化したときや終末期については協力病院・家族と十分に話し合いをしながら支援していきたい。利用者は法人の特養に申し込みをする人が多い。	ホームは「生活の場」との考えに立ち、重度化した場合や終末期の支援については、利用者・家族・病院と十分話し合いをしながら対応していきたいとしている。また、利用者の中には、終末期は特養ホームへの入所を希望している者もいる。	母体となる特養への入所は家族も期待するなかで一つの選択肢となっている。そのような選択肢も考慮しながらホームとしてどこまで支援が可能か学習・研究し、他ホームの取り組み情報なども得ながら取り組んでいくことが望まれる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	新職員には消防署で普通救命講習Ⅱを受講し全員が実践力を身につけている。又定期的に通報訓練なども行なっている。マニュアル・急変時の対応の本は見えるところにある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	隣接する北部DSと合同避難訓練を開催し地域の方も参加していただいている。又職員内で災害に備え定期的に訓練に取り組んでいる。	隣接する北部デイサービス施設と合同で、地域住民による「災害援助協力会」の参加協力の下、避難訓練を実施している。更に、蛍光たすきや救急具の常備、居室入り口には避難済み確認の在・不在カードを表示するなど、災害対策のきめ細かな工夫がみられる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	やさしい声がけを意識し利用者が傷つかないように配慮してる。訪室時はノックしプライバシーを損なわないようにしている。トイレの声かけもさりげなくしてる。難聴者のひとには声の大きさに配慮しながら対応している。	利用者の人格尊重の基本姿勢に立って、丁寧に優しい声がけを心がけ、利用者の誇りを傷つけたり、なれなれしい言葉使いは絶対にしていないようにしている。また、居室への入室時のノックなど、プライバシーの確保に十分留意している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の能力に応じた話かけで希望や思いを聞いている。介護者側の考えを押しつけないように自己決定を促す言葉がけにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者との会話の中で本人のやりたいことなど気持ちを引き出しくらしの支援をしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服は自分で選んで着てもらっているが選択できない場合は清潔を考え支援している。長寿を祝う会では、女性利用者は全員化粧し女性らしさを強調したり鏡をみてにっこり笑う姿があった。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	嗜好調査をしたり普段の会話の中から聞き出し献立に取り入れている。夏～秋にかけて畑で採れた野菜を献立に取り入れ旬を味わっている。料理の下ごしらえ・片付けは利用者とともにし、作る楽しみ食べる楽しみが感じられるように支援している	嗜好調査を行い、一人ひとりの好みの食べ物を把握し献立に取り入れている。また利用者が料理の下拵えや後片付けなどにも関わり、喜びや満足を覚え職員と楽しく和やかに食事をしている様子が伺え、食事が楽しみの場となるよう支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量は毎食確認し少ない人には声かけしている。歯の状態により刻み食・トロミ食の人もいる。お茶など水分は残さないよう声がけしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアの支援をしている。利用者の状態にあわせ見守り・介助をしている。夕食後は義歯洗浄剤を使用し清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の排泄パターンを把握しその人にあった時間にトイレ誘導をしている。失敗を減らし気持ちよく排泄できるように支援をしている。入所時はリハビリパンツを使用していた人が現在、普通のパンツを使用している例もある。	職員全員が利用者の排泄パターンを把握し、利用者の排便の時間に合わせて、或いは利用者の様子やしぐさ等を敏感に察知するよう努めながら、その人に応じてさりげなくトイレ誘導している。これによりリハビリパンツから普通のパンツに改善された利用者もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェックを毎日している。便秘予防のために牛乳・乳製品・食物繊維を多く含む食品を献立に取り入れている。運動不足にならないように歩行練習・リハビリ体操は欠かさずおこなっている。水分補給も残さず摂るよう声かけしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	ゆっくり入浴できるように時間の配慮をしている。拒否のある人は次の日に声をかけたりして工夫している。入浴時はコミュニケーションをとるように心がけている。	入浴は週2～3回実施しているが、希望しない場合は希望する日に利用できるよう支援している。入浴はゆったりと楽しい気分で過ごせるよう利用者の懐かしい思い出話等を引き出したりして、楽しく会話しながら十分な時間とって支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個室の好きな時間に休息をとっていただいている。又小上がりやソファーに座り食後であったり入浴後であったり自由にくつろいでいる。日中の活動を多くし夜間はぐっすり眠れるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬は処方都度の薬局からの説明書を読み確認している。個別に管理され所定の場所に管理している。服薬は、直接手渡しをし、飲み込むまで確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	センター方式やアセスメントを使い一人一人にあった役割を發揮してもらっている。そのことによって気分転換にもつなげている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	春の花見・秋の紅葉狩りには出かけ、季節を感じてもらっている。ドライブは予定を立てたり突発的に行くときもあるが利用者はとても楽しんでいる。又、天気の良い日はテラスで外気浴しながら皆で好きな歌をうたうときがある。	天気の良い日はゴミ捨てを兼ねて散歩したり、時々ドライブをしたりして外出を楽しんでもらっている。また季節に応じて春は花見、秋は紅葉狩りなどに出かけ、外食も楽しみながら楽しい時間を過ごせるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自己管理できない人もいるので金庫に保管し使うときに持ちだすようにしている。希望があれば一緒に買い物に行く機会がある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠方にいる家族から荷物が届いたときは電話を使い連絡をいれる利用者もいる。又希望される時は電話を取り次いだりしてる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を感じられるように壁面に利用者と職員で作った作品を季節ごとに展示している。行事の写真も掲示している。共用空間は職員・利用者で掃除をしている。各所に温室度計があり常に確認しながら環境整備をしている。	ホールには利用者・職員手作りの色々な作品や各利用者の大きな写真が飾られ温かな雰囲気がある。ホーム内には畳敷きの小あがり(3箇所)や眺望豊かなテラスがあり、気分に応じて一人で横になったり、外気を浴びながら皆で唄を歌ったり、その時々好きな場所で思い思いの過ごし方が出来るよう居場所作りの工夫が見られる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者同士の関係つくりのためリビングのソファ食堂の椅子・廊下の小上がりなど自由に使われている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使い慣れている家具や寝具を持ってきていただきその人らしく部屋をレイアウトしている。自室には、位牌・位影を持ち込んだりしてる人もいる。又家族との写真・作品を飾っている人もいる	居室は8畳ほどのゆったりした広さであり、利用者はそれぞれ使い慣れたもの、思い出のある物を持ってきて好みの配置をして利用している。位牌・遺影や家族写真、自分の作品等を飾っている人もおり、安心して居心地よく過ごせるよう工夫されている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	浴室内・トイレ・廊下には手すりがあり安全に移動できるような配慮がしてある。台所には昇降式の調理台が設置してあり利用者の方が活動しやすくなっている。		